平成２９年度　姉妹校等留学プログラム
サンディエゴ国際交流プログラム

(1)学校・団体名/種類（派遣高校生の人数）

横浜市立金沢高等学校／海外研修（２名）

(2)渡航先

国／都市：米国／サンディエゴ市

外国の高校：ミッションベイハイスクール

(3)期間

平成 30 年３月 17 日～平成 30 年３月 23 日（７日間）

(4)プログラムの趣旨・目的

サンディエゴ市ミッションベイハイスクールで、現地の高校生活を体験し、生徒がお互いの理解を深め、グローバルな視点を持てるようにする。また、グローバル人材として活躍するための素養を養う。

(5)活動内容

〇ミッションベイハイスクールを中心とした、近隣区域の小学校、中学校、高校の生徒との交流を深める。

〇ホームステイをすることで、異文化に触れ、現地の日常生活を経験する。

〇横浜市の姉妹都市であるサンディエゴの歴史や地理、文化に触れる。

(6)実績・成果

〇派遣高校生　ＨＳさん

・「選挙に対する意識」

《テーマを決定するにあたって》

「私たちは 18 歳になれば投票ができるようになる。」

意識してはいるものの、実際に深く考えることはまだ知識に乏しい私には難しいと感じていました。

2016 年、国が憲法を改正し選挙権年齢を 20 歳から 18 歳に引き下げました。今 17 歳の私は、残り一年足らずでその権利「一票」を手にすることになります。「私自身はどう向き合うべきだろう。」日本ではあまり政治に関する自らの考えをオープンに話さないことが多いですが、米国とはどのような差があるのかとても気になり、今回このテーマに決定しました。今回の調査では大きく 2 つの項目に絞ってアンケートをとり、そのうちの何人かに詳しく意見を聞きました。

《現代の選挙制度》

現在、米国では米国憲法下において 18 歳以上のすべての男女に投票する権利が保障されており、25 歳から下院議員への立候補が認められています。(上院議員は 30 歳、副大統領・大統領は 35 歳以上で、他条件に市民権と居住期間が大きく上げられます。)米国憲法は連邦レベルの公職に就くための資格を定めていますが、全米 50 州はそれぞれ独自の憲法を持っており、州の役職に関する独自の規則を設けています。連邦レベルにおける選挙においては大統領・副大統領の任期は４年、下院議員は２年、また上院議員の任期は６年で２年ごとに３分の１の人数ごとで改選される仕組みになっています。

対する日本国おいては、18 歳以上のすべての男女に投票権が与えられており、25 歳から衆議院議員に、30 歳以上で参議院議員への立候補が認められています。衆議院議員の任期は４年、参議院議員の任期は６年で３年ごとに半数ずつ改選されていく仕組みになっています。

《各国における選挙情況》

近年の選挙において、米国では 2016 年アメリカ合衆国大統領選挙では 55.3 %の投票率、日本国では 2017 年衆議院議員総選挙では 53.68 %の投票率を獲得しています。

投票率にはさほど差がない両国ですが、私はこのような言葉を聞いたことがあります。

「アメリカ人は政治に関心が高く、日本人はそれに比べて無関心な人が多い」

投票率に目を向けると、この言葉は矛盾していることがわかります。果たして本当に矛盾した言葉なのでしょうか。今回の調査では数字に特化するのではなく、なるべく一人一人の声に耳を傾けることにしました。

《調査結果》

今回の調査ではサンディエゴに暮らす 15 歳から 39 歳の 43 人、日本に暮らす 15 歳から 47 歳までの 38 人、計 81 人にアンケートや質問に答えてもらいました。

問１　投票に行くことは世の中を変えることに関して意味があるか否か。

米国		日本
100 %	YES	100 %
0 %	NO	0 %
0 %	DON’T KNOW	0 %

問２　今の自分の立場を明確に述べられるか。

米国		日本
83.5 %	YES	10.5 %
16.3 %	NO	10.5 %
0.02 %	DON’T KNOW	78.9 %

問３　自由回答(個人的意見)

・私はまだ 17 歳で選挙権を持っていないが、この前の大統領選挙で家族や友人と自分の立場について考える機会があった。私の場合はトランプもクリントンのどちらの政策にも共感が持てなかったので、Populist Party (人民党)というどちらにも属さない立場に身を置くことにした。(17 歳米国)
・私はトランプが好きではない。クリントンに投票したが今回トランプが大統領にえらばれた。自分の意見が思うように反映されたわけではないが、それでも投票することには意味がある。これは私たちの権利であるし、これをこちら側が捨ててしまえは本当に無力になってしまうから。(38 歳米国)
・18 歳から投票することができることは知っているが、きちんと自分がどこを支持するのかを考えたことがない。戦争はしたくない、教育にお金を使ってほしい、個人で考えることはあるけど、それを政治と照らし合わせたことはない。(17 歳日本)

《調べてみて》

結果から見てわかるように、国に関係なく全員が投票することに意味があると考えているようでした。しかし、個人的な今の立場が言えるかという質問では両国の違いは歴然としており、米国では投票権をまだ持てない年齢でも、自分の意見をきちんと持っている人が多く、18 歳未満でも 29 人が自らの立場を明確に示すことができると答えました。それに比べて日本では、投票権を持ち始めてから国内情勢に目を向け始める人が多く、まだ投票権を持たない 18 歳未満で自分の意見をはっきりと言えると答えたのは１人、調査全体でも ４人でした。

私自身、ぼんやりとした支持政党、政権に求めることは頭の中にありますが、自信をもってはっきりと人に話せるほど明確なものではありません。自分の立場や意見を明確にすることは、周りの人間と価値観を突き合わせるときにおいてとても重要なものです。政治の話題に限らず学校の授業の中でもその力は必要であり、また比較的「控えめだ」と言われる日本人にとって今一番必要なものだと感じました。自らを発信していくためには、周りにぶつかっていくための勢いや根拠のない自信だけではどうしようもありません。相手を納得させるだけの知識、そして自分の考えが必要です。私はこれからいかなる場合においても自分の立場を明確にできるように、普段から自身と向き合うこと、新聞などをもっと活用して知識を身に着けていきたいと思います。

•「行動から新たな原動力を」

一週間の研修、後悔は数えきれないだろう。しかし、 この研修の参加に踏み切ったことには一ミリの後悔もない。たくさんの人がかかわったこの研修を無事に終えることができ、私は大きな達成感と幸福に包まれている。

私は「英語」という科目が苦手である。人はそんなことないでしようと言うが、今回の応募の前も後も、私の中のその事実がどこかで自分自身を縛り付けていた。不安の中で迎えた研修初日、私たちはホストファミリーと半日ほど時間を共にした。初日にして戸惑う出来事も多く、「自分がもっと英語が使えたなら、状況はもっと違ったんじゃないか」うまく言葉が出てこない自分に、もどかしさと悔しさを覚えた。しかしその時、アメリカに着いて最初に言われた現地コーディネーターのＳさんの言葉を思い出した。「過去は変えられない、今を頑張ればそこに未来は積み重なっていく」。前を向かなければ、これからのことを考えなければ。私はそう思った。

残り約６日間の研修は「挑戦」、この一言に尽きるだろう。現地の高校生に自分から積極的に話しかけること。ホストファミリーとコミュニケーションが取れるよう、一緒にいる時間を増やすこと。話のネタになるように、みんなの写真もたくさん撮ること。そこには全て苦手意識のあった「英語」がカギになった。しかし日を重ねるうちに、私自身を縛り付けていたはずの英語への苦手意識は、どこかへ消えていた。決して苦手意識がなくなったわけではない。今でも苦手なことには変わりないが、そこに縛られる必要と意味がないことに気づいたのである。この研修中で私は何度“Once again, please?”と言ったかわからない。そのことを気にするよりも、自分のためにそして未来のために行動を積み重ねていくしかなかったのである。

「行動」は何を生むだろう。失敗を生み、後悔を生み、しかしその中で新たな原動力を生む。私は今回の研修でそう思った。行動を起こさなければ、失敗も後悔もすることはない。しかしそれは、自分自身を成長させることも変化させることもなく、その時間は無駄にしかならないのである。たとえ失敗しても後悔しても、新たな原動力を得ることができたのなら、次の機会で必ず活かすことができる。

私は Farewell Party で司会としてまとめのスピーチをさせてもらった。その甲斐もあり、 MissionBayHighschoool の友達と今でも連絡を取り続けることができている。正直スピーチをすることも苦手で、頭はずっとパニック状態だった。後悔もたくさんあるが、また機会があれば挑戦してみたいと思えるようになった。

私は四月から３年生として、また受験生としてたくさんの壁を越えていかなければならない。その時私は後悔のない立ち向かい方で、自分が選んだ未来で胸を張れるよう、行動し続けたいと思う。また新たな原動力を、力強く前に進む原動力を。私自身の行動で何度もつかんでいきたい。

〇派遣高校生 ＨＳさん

•「言語研究と世界から見た日本」

今回サンディエゴに研修に行くにあたり、「英語の現代語について」と「日本の文化は海外からどのように見られているのか」という２つの研究テーマをもって現地で調査にあたった。ここではその結果について述べていく。

はじめに、現代語について。日本では学べない言い回しをネイティブを通して知っていこうと思って考えたテーマだが、実際行ってみたところ、日本で学ぶものとは全く違う英語ばかりで、その違いように愕然としたほどだった。

その中で得たものの例としては、日本でも使われることがある“Oh my god!”のフレーズに関係するものだ。数日間滞在しただけでも、“Oh my god,”“Oh my goodness,”“Oh my gosh”の３つが不規則に使われているのが見てとれた。調査を進めると、この違いはキリスト教の関係で“god”を口にしてはいけないという風潮から別の言い回しが生まれたということもわかった。また、こちらも日本人皆存じているであろう“Nice to meet you”の台詞。こちらはずっと「はじめまして」という意味で習ってきたので初対面のはじめの挨拶のみで使うと思っていたが、実際は別れの時の方が頻繁に使っていた。こちらはテーマとは少し違っているかもしれないが、会話に重点をおき、渡航しないとわからないことを収穫として得ることができた。そして同時に日本で英語が読み書きできることと英語圏の国にいって英語がスムーズに話せることは全く違うものなのだと思い知った。

次に２つ目のテーマ、「日本の文化は海外からどのように見られているか」について。現地では、ホストファミリーから小学生に至るまでの幅広い年齢層の人々へ「日本の文化などについてどんなことを知っているか」という質問をすることによって調査をした。回答を得られた人からは、「寿司が好き」「アニメをよく見る」「ゲーム(任天堂)が好き」(ちな

みにアメリカでは日本製のゲームが日本よりかなり高い値段で売られているらしいこともわかった)といった内容が主だった。また「日本に行ったことがあるか」という質問をしてみると、「行ったことはないが行きたい(まれに住みたい)」という回答が一番多かった。現地で交流した生徒たちが日本に興味のある人々だということもあるかもしれないが、日本文化を尊重している意見ばかりであった。

また、日本にいるだけでは気付けない自国の文化も発見した。地元の学生たちと一緒に折り紙をしていた時、ある生徒が日本人の誰もが鶴の折り方を知っているのを見て、「この折り方は学校で習うのか」と聞いてきた。「学校に入る前に家族が教えてくれる」と返答すると、感嘆した様子だった。確かに日本人に鶴の折り方を知らない(教えてもらったことがない)人はめったに見ないし、皆が折れることに疑問を抱いたこともなかったので、それが日本の文化として根付いているのだということに気付いた。

以上の調査結果から、日本の文化は海外からも非常に肯定的に捉えられていて、漫画やアニメなどユニークなものも海外に積極的に受け入れられていることがわかった。さらには我々が無意識にも文化を受け継ぎ、発信できる立場であることにも気付くことができた。

今回の渡航にあたり設定した研究テーマは、ともに数多くの人へ質問を要する内容であったが、どちらも結果を得ることができ、加えて自分自身や日本についても新しい発見があったので大きな収穫であった。これからは未来に向けて、日本と世界の違いを経験をもとに理解した上で、時には自分が日本人であることを誇りにして生きていこうと思えるような、大きな意味のあった研修であった。

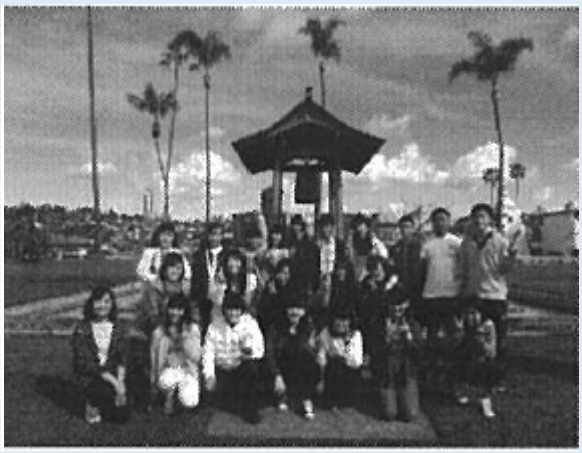
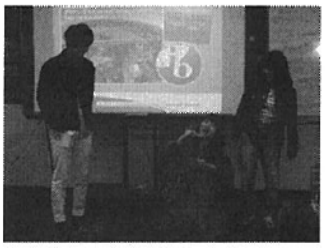
•「研修を終えて」

今回のサンディエゴへの研修は、自身初の日本からの出国だっただけに事前研修の時から期待より不安の方が上回っていると感じることも多々あった中での渡航であった。実際には、現地では朝から晩まで初体験に満ちていて、不安など感じる暇もないほど充実していた。それにより印象に残ったことを一つずつ思い返すと膨大な量になるため、その中でも特に紹介したいと思うものをいくつか述べていこうと思う。

まずは醍醐味のホームステイから。いつでも海外に行くことはできるが、ホームステイは機会がないとできないことだったのですごく良い経験になったと感じている。今回のホームステイ先は６人家族だったのでたくさんの交流があった。食事をはじめ日常生活を共にするなかで言葉を交わし、家庭のルールも守りつつ、良い関係を築くことができたのは今後への自信にもなり得ると思っている。

次にこのプログラムにおいて最重要項目である地元の学校との交流である。小学校から大学まで全ての過程を回ったわけだが、やはりミッションベイ高校での交流は心に残るものだった。生徒たちは温かく迎えてくれ、加えて自分の未熟な英語も気にせず積極的に交流してくれたことには感謝の一言に尽きる。「ネイティブの日本人」として日本語や折り紙、日本食などを紹介する企画を通し日本の文化を伝えることができ、さらには自分の趣味であるビデオゲームを通じて仲良くなれた人もいて、趣味がそういった場面で発揮できたのが良かった。また、小学校から自主性を重視した授業を取り入れるといった教育のレベルが非常に高く、講義型が一般的な日本との違いを痛感した。

「考え方が変わった」と感じたのは、カリフォルニア大学サンディエゴ校で受けた講義である。そのなかで、『英語を武器にするのではなく自分の強いところをしつかり伸ばせ』という趣旨の言葉を聞いたときに、確かに母国語が違うのだから英語が完璧でないのは当たり前だし、それ以外に長所がなくては何にもならないので、自分の勉強したいことを究めていくことの重要さを理解した。だからこそ今のうちに世界を見て、自分と向き合うことが大切だと思い、今回の渡航に大きな意味を感じた。

これらは５日間の滞在のうちに体験したごく一部の内容であるが、どれも自分にとって財産となるものになった。そしてそれらを高校のうちに得たということも大きな意味があ

ると思っている。これからの人生も、この機会で培った偽らない「等身大の自分」と積極的に交流していく精神を大事に生きていこうと思った。